「主による勝利」創世記14章

I 王達の戦い

1. 戦いの原因。この章の出来事は、聖書の歴史が決してこの世の歴史と関係のないものではなく、むしろ密接な関係がある事、つまり神はすべての歴史を支配しておられる事を示している。そして私達信仰者がこの世の戦いにどのように関わって行くべきかを示す出来事。この戦いは、12年間、ケドルラオメルに従っていたソドム、ゴモラの王達が彼に背いたために、ケドルラオメルとその連合軍がソドムの王達を再び配下に置こうとして始めた戦いだった。
2. 戦いの過程。ケドルラオメルの連合軍は次々に諸国を打ち破りながら、ソドムの王達が支配する地に押し寄せて来た。正に連戦連勝、向かうところ敵なしという勢いだった。これに対し、ソドムの王の連合軍は出て行き、シディムの谷、塩の海（死海）において戦う備えをした。
3. 戦いの結果。それは、ソドムとゴモラの王の連合軍の完敗だった。全財産と食料全部を奪われ引き揚げて行かれてしまった。その時、ソドムに住んでいたロトも捕虜になり、彼の財産も奪われてしまった。ロトが自分の目の欲で見るところに従って選択した地は、一見繁栄し安全に見えたが、その実、それは脅かされる危険な所だった。「金持ちになりたがる人（金や富を、すべての与え主の神よりも第一とし、執着し、偶像とする人）は、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります」（1テモテ6：9）。「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえます」（1ヨハネ2：16, 17）。アブラムとロトの対照的な姿から、私達も自分は、どうだろうかと思われたい。

II 信仰の勝利。：13—16

1. 戦いの動機。ソドムが略奪され、甥のロトも捕虜とされた事を聞いたアブラムは、戦いに参加する事を決意した。アブラムの戦いの動機は攻撃や侵略ではなく、自分の親類の者を取り戻す事だった。ここでも考えさせられる。主の園の様に良く潤っていたソドムの地を自分の目の欲で選んだロトを自分なら、すぐに救出に行くだろうか。それも、非常に強い相手と戦わなければならない。アブラムの愛、心の広さに教えられる。と同時に、アブラムの愛、勇気は、13：4の「主の御名によって祈った」主への立ち返り、主との交わりから生まれている事も忘れてはならない。私達も、いつも主への悔い改め、立ち返り、交わりから、愛、寛容、広い心、勇気をいただきたい。
2. 戦いの方法。アブラムは自分の家で生まれたしもべ、信頼出来る、良く訓練された者達318名を引き連れ敵を追跡した。同盟国のmamレ、エシュコル、アネルも一緒に出陣したが、それにしても大軍勢ではなかったと思われる。主は、主に従う少数者と共において、共に戦って下さる。士師記のギデオンの300人の例を見ても、この事を確信する事が出来る。
「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」（イザヤ10：10）
「強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにおいても、あなたとともにいるからである」（ヨシュア1：9）。
3. 戦いの結果。戦いは主の力による勝利だった。アブラムはソドムとゴモラに奪われた「すべての財産を取戻し、また親類のロトとその財産、また女たちや人々をも取り戻し」して帰って来た。：

16. 彼はそれ以上戦いを続けなかった。それは彼の戦いの動機が侵略ではなく、あくまでも防衛だったから。この事も、今日の適用に教えられる。

III 栄光は神に。：17-24。1. 勝利の背後におられる神に栄光を帰さないソドムの王。アブラムが戦いに勝って帰って来た時、彼を迎えた人が二人あった。その一人はソドムの王だった。彼はアブラムを迎えるために王の谷という所にやって来た。しかし、彼の言葉には、本当の感謝がないように思われる。：21。彼はアブラムの勝利の背後に「神の存在」を見い出してはいない。彼は、すべてのものは自分のものという感覚のように思われる。やがて彼はソドムの町と共に滅ぼされてしまうことになる。2. 神に栄光を帰すメルキゼデク。アブラムを迎えたもう一人の人物は、シャレムの王メルキゼデク。彼は「いと高き神の祭司」と言われている。：18。またヘブル人への手紙によれば、彼は「平和の王」「義の王」（ヘブル7：2）。彼は王であると同時に祭司であり、正に詩篇110：4にあるようにキリストの予表であると言える。彼は、アブラムに「パンとぶどう酒」を持って来たが、ここにアブラムの肉体的な必要を満たす配慮とアブラムの労苦に対するねぎらいを見ることが出来る。彼はアブラムを祝福した。「祝福を受けよ。アブラム。天と地を造られた方、いと高き神より。あなたの手に、あなたの敵を渡されたいと高き神に、誉れあれ。」：19, 20。彼は、アブラムの勝利が神に祝福されたものと認め、勝利が神の助けによるものである事を認め、神に栄光、誉れを帰した。アブラムは、このメルキゼデクから肉体的な必要と霊的な祝福を受けた。これに対して「アブラムは、すべての物の十分の一を彼に与えた」：20。3. 神に栄光を帰すアブラム。彼は、「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください」：21というソドムの王の世的には魅力のある提案を受け入れなかった。ソドム王の中に真の神への信仰を見る事が出来なかったからであり、隠されている高慢を見たからだろう。アブラムは「天と地を造られた方、いと高き神、主」に誓っている。：22。この神の呼び名は、19節のメルキゼデクの祝福の影響を受けている。これは、アブラムの信仰がメルキゼデクの祝福により高められた事を示す。彼は、ソドムの王に「アブラムを富ませたのは私だ」と誇る機会を与えるべきではないと考えた。それは神の栄光を汚すからである。それで彼はソドムの王に言った。「糸一本でも、くつひも一本でも、あなたの所有物から私は何一つ取らない。それは、あなたが、『アブラムを富ませたのは私だ』と言わないためだ」：23。しかし、アブラムは自分の信仰故に、他の人に対する配慮を無視したわけではなかった。彼は、言った。「ただ若い者たちが食べてしまった物と、私といっしょに行った人々の分け前は別だ。アネルとエシュコルとママレには、彼らの分け前を取らせるように」：24。彼は自分の信仰の確信の故に、他の人への配慮を無視したわけではなかった。私達も、自分の確信を他人に強制し、愛と配慮が欠ける事にならないよう祈りたい。「それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい」ローマ14：5。祈り：世の欲ではなく、主に仕えることが出来ますように。神により恵み、勝利が与えられた時、神に感謝し、神に栄光を帰すことが出来ますように。